

9月になりました。

外は33度の極暑。室内で平成30年2018年の残暑見舞いを作成中です。

暑中見舞いではないのでまだまだOKなんですよ。

実際文句なく暑い！！

高齢なお客様と直接関わる商いをしていると、御常連の方に「この所お顔を見てないね！どうなさったのかしら？」と感じる事があります。ご友人などから「コレコレこういう事」と消息情報があれば「あーそうか」と安心し、納得できます。が、ゆうゆう館利用者と館業務者「それ以上でも以下でもない」という関係性の方が多く現実的には消息不明のまま、私達の中で自然消滅して「あの方」が消えていっています。

でも、心をよぎった「どうなさったのかしら？」はその方の人生領域が私達のそれと重なった為の事象。

それは、私達の中には「あの方」が「確かに存在した」という立証だと思って一時微笑む事にしています。

私の子ども頃のお使いお作法は「玄関前で大きな声でご挨拶」。(ピンポンのあるお宅では堂々と押せるのでとっても嬉しかったです！)玄関が開いたら肅々と口上をお伝えし任務完了。ですが、不在だった時には「お隣さん」をお尋ねします。私はごく当然な行動して「お隣がご不在だったのですが・・・？」とお聞きします。するとお隣さんは「先程お水まいていらしたからお買いものじゃないかしら」「お使いね、お戻りになるまでここでお待ちなさい」とか「一昨日熱海に行かれたとお母様にお伝えてね」などとお答えを頂きました。でもお隣がお一人暮らしだとすると「そういえばこの所お姿見ないわ」となり、お隣さんは近所に必ずいる情報通の方に連絡し、探索が開始。最終的に私は母が納得できる情報を得て、その使命を果たす事ができたのです。個人情報なんて観点もなければ、人を疑うという視点もほとんどない様な時代。それが昭和中期の「ご近所感」。組織として強制的な活動を強いる「隣組」ではなかったと思いますが「向こう三軒両隣」は「互いに気にしているべき領域」としての日常感覚を持って暮らしていたと思います。

8月の雑感にも触れた「孤独死・孤立死」という問題には「向こう三軒両隣 感」の様な「他人との領域感」が関係しているのではないかと考えています。しかし現在その感覚共有は難しく、更に言えば「向こう三軒両隣感」を持つ事が絶対に正しいのだとも言いきれないと思います。実際、過去その常識の中で育った私でも「正しさ論」には若干疑問を持たずにはいられません。正直、その周囲との関係性が若い時は「ぶち壊したい程 うざったかった・・・」今でも疑問を持つ事があります

「私の管轄領域に存在が在る人との葛藤」「自分領域の保持。侵入者への対応方法」コミュニケーション能力とか空気読む等と言う小手先の社会性のスキル向上だけで上手く処理できるとは思えないのです。

気にもとめない！見過ごす！の裏返しは「気にもされない、見過ごされる」という状況を生み出す可能性が高い。その様な状態はウエルカムとは言えません。そこで私達プロップ K は関係性作りの感覚基準の指針を作りました。そのモットーが「ギスギスではなく、さりとしてベタベタでもない、サラサラとした心地よい関係性の構築」です。この判断の適用基準はそれぞれ思う形で良いとしています。各自のマインド感を重視し観念的で曖昧でざっくりです。ですが、このモットーに照らした個々の想いと感性、それぞれの正義感をもって他の人との距離感を作って行ける様にする事が重要。その過程で他の領域との接触に対しては自然に融合したり離れたたりできる事を望んでいます。それを繰り返す事で各自の「心地よい領域」「居場所」ができるのではと・・・そして、いつの日か、地球全体に波及しないかな？なんてね！

私の父が1泊旅行に行っていた様です。多くの方から問合せ詰問を頂きました。ありがたい事です。

ですが・・・オヤジに「家開けるときには娘に伝えろ！」と一喝した9月の始まりです

